

森岡清美の「家」研究からの示唆  
—真宗教団と華族社会に関する研究を中心に—

米村千代 (千葉大学)

### 1. はじめに

本報告は森岡清美の真宗教団および華族社会に関する研究を取り上げ、そこで近代日本における「家」の構造と変動がどのように論じられてきたか、今日の家族研究に携わるわれわれが、森岡の「家」研究からどのような示唆を受け取ることができるのかという点について拙い報告を試みるものである。森岡清美の「家」研究を総合的、網羅的に論じることは、報告者の能力をはるかに越える。ここで紹介しようとする二つの領域に絞ったとしても容易ではない。しかしながら、森岡の「家」研究を捉えようとするのであれば、真宗教団および華族社会の研究は避けて通ることはできないであろう。そこで本報告では、家族研究との接合面が多いと思われる点に限定して、これらの研究を再読する。

さらに、森岡の「家」研究に取り組むための補助線として「家」と家族の両面に注目し、森岡の戸田貞三に関する論考もあわせて取り上げる。森岡の社会学的研究は、宗教と家族の2領域に分離して整理されてきたし、森岡自身もそのように表現している。と同時に、言うまでもないことかもしれないが、両者は森岡の社会学的関心の中では分散しているのではなく、相互に関連している。森岡の戸田理解にもこの点を問うヒントが含まれていると考える。これらの点を問い直すことから、現代の家族研究において、森岡の「家」研究がいかに生きているかを捉えることが本報告の課題である。

### 2. 真宗教団研究と華族研究

真宗教団研究に関しては、主に『真宗教団と「家」制度』と『真宗教団における家の構造』を、華族社会の研究としては『華族社会の「家」戦略』を取り上げる。森岡の真宗教団研究は他にも複数あるが、本報告では、「家」に焦点が当てられている上記の2点に絞ることとする。教団研究と華族研究に共通しているテーマは、近代国家体制のもとでの「家」の重層性と変動、「家」が内包していた緊張である。両研究とも社会の上層を取り上げているものの、実はそこにかかわる人々の層は幅広く、それが故、組織がはらんだ矛盾や緊張に視線が向けられている。そこに見られる「家」の分裂と統合のダイナミズムに、日本の近代家族の登場過程を探ることもできるだろう。

### 3. 制度論への関心：森岡の戸田貞三論から

日本の家族社会学を振り返る際、その学説の展開は「制度から集団へ」と整理されることが一般的なのではないかと思われる。家族の集団論的研究を戦前において牽引してきたのは戸田であるが、森岡は、戸田の制度論に対する関心と態度について言及している。ここに森岡自身、制度論に問題関心を持ち続けていたことがうかがえ、そのことが「家」を問い続けたことにもつながっていると思われる。森岡が家族学説と家学説双方に取り組み、その結合をはかろうとした過程を考察するために、森岡による戸田の集団論と制度論の整理を検討する。

### 4. 家族変動論としての「家」研究

「家」と家族の概念規定については、有賀喜多野論争をはじめとして数々の議論が展開されてきたが、ここでは広義の意味での家族変動論として森岡の「家」研究を振り返り、今日の家族研究に通じる示唆を受け取りたい。教団組織と華族社会は、いずれも、今日の家族研究が射程にする関係よりも、より大きな組織を対象としている。直接の研究対象となっているのは、家族そのものよりも組織や経営体としての大きな「家」であり、現代の家族研究とは遠いテーマを扱っているように見える。しかし、同時に、大きな「家」には、より小さな関係である家族としての「家」が内包されており、日本近代における家族的な「家」とより大きな「家」との間の関連が論じられている。それらを「家」の内的な緊張や変化のプロセスとしてみるだけでなく、近代国家および近代天皇制の成立、身分制度や産業構造、地域社会の再編という社会変動のなかで位置づけようとするのが森岡の歴史社会学、家族変動論であり、その視点は時代を超えて我々に多くの知見を投げかけている。

(キーワード：「家」研究 森岡清美 家族変動)